頭ならびに腹

横光利一

真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で馳けてゐた。沿線の小駅は石のやうに黙殺された。

とにかく、かう云ふ現象の中で、その詰み込まれた列車の乗客中に一人の横着さうな子僧が混つてゐた。彼はいかにも一人前の顔をして一席を占めると、手拭で鉢巻をし始めた。それから、窓枠を両手で叩きながら大声で唄ひ出した。

「うちの嬶ア

福ぢやア

ヨイヨイ、

福は福ぢやが、

お多福ぢや

ヨイヨイ。」

人々は笑ひ出した。しかし、彼の歌ふ様子には周囲の人々の顔色には少しも頓着せぬ熱心さが大胆不敵に籠つてゐた。

「寒い寒いと

云たとて寒い。

何が寒かろ。

やれ寒い。

ヨイヨイ。」

彼は頭を振り出した。声はだんだんと大きくなつた。

彼のその意気込みから察すると、恐らく目的地まで到着するその間に、自分の知つてゐる限りの唄を唄ひ尽さうとしてゐるかのやうであつた。歌は次ぎ次ぎにと彼の口から休みなく変へられていつた。やがて、周囲の人々は今は早やその傍若無人な子僧の歌を誰も相手にしなくなつて来た。さうして、車内は再びどこも退窟と眠気のためめに疲れていつた。

そのとき、突然列車は停車した。暫く車内の人々は黙つてゐた。と、俄に彼等は騒ぎ立つた。

「どうした！」

「何んだ！」

「何処だ！」

「衝突か！」

人々の手から新聞紙が滑り落ちた。無数の頭が位置を乱して動揺めき出した。

「どこだ！」

「何んだ！」

「どこだ！」

動かぬ列車の横腹には、野の中に名も知れぬ寒駅がぼんやりと横たはつてゐた。勿論、其処は止るべからざる所である。暫くすると一人の車掌が各車の口に現れた。

「皆さん、此の列車はもうここより進みません。」

人々は息を抜かれたやうに黙つてゐた。

「H、K間の線路に故障が起りました。」

「車掌！」

「どうしたツ。」

「皆さん、この列車はもうここより進みません。」

「金を返せツ。」

「H、K間の線路に故障が起りました。」

「通過はいつだ？」

「皆さん、此の列車はもうここより進みません。」

車掌は人形のやうに各室を平然として通り抜けた。

人々は車掌を送つてプラツトホームへ溢れ出た。彼等は駅員の姿と見ると、忽ちそれを巻き包んで押し襲せた。数箇の集団が声をあげてあちらこちらに渦巻いた。しかし、駅員らの誰もが、彼らの続出する質問に一人として答へ得るものがなかつた。ただ彼らの答へはかうであつた。

「電線さへ不通です。」

一切が不明であつた。そこで、彼ら集団の最後の不平はいかに一切が不明であるとは云へ、故障線の恢復する可き時間の予測さへ推断し得ぬと云ふ道断さは不埒である、と迫り出した。けれ共一切は不明であつた。

いかんともすることが出来なかつた。従つて、一切の者は不運であつた。さうして、この運命観が宙に迷つた人々の頭の中を流れ出すと、彼等集団は初めて波のやうに崩れ出した。喧騒は呟きとなつた。苦笑となつた。間もなく彼らは呆然となつて了つた。しかし、彼らの賃金の返済されるのは定つてゐた。畢竟彼らの一様に受ける損失は半日の空費であつた。尚ほ引き返す半日を合せて一日の空費となつた。そこで、此の方針を失つた集団の各自とる可き方法は、時間と金銭との目算の上自然三つに分かれねばならなかつた。一つはその当地で宿泊するか、一つはその車内で開通を待つ

か、他は出発点へ引き返すべきかいづれであるか。やがて、荷物は各車の入口から降ろされ出した。人波はプラツトから野の中へ拡り出した。動かぬ者は酒を飲んだ。菓子を食べた。女達はただ人々の顔色をぼんやりと眺めてゐた。

所がかの子僧の歌は、空虚になつた列車の中からまたまた勢ひ好く聞え出した。

「何んぢや
此の野郎
柳の毛虫
払ひ落せば

またたかる、

チヨイチヨイ。」

彼はその眼前の椿事は物ともせず、恰も窓から覗いた空の雲の塊りに噛みつくやうに、口をぱくぱくやりながら。その時である。崩れ出した人波の中へ大きな一つの卓子が運ばれた。そこで三人の駅員は次のやうな報告をし始めた。

「皆さん。お急ぎの方はここへ切符をお出し下さい。S駅まで引き返す列車が参ります。お急ぎのお方はその列車でS駅からT線を迂廻して下さい。」

さて、切符を出すものは？　群衆は鳴りをひそめて

互に人々の顔を窺ひ出した。何ぜなら、故障線の列車はいつ動き出すか分らなかつた。従つて迂廻線の列車とどちらが早く目的地に到着するか分らなかつた。

　さて？

　さて？

　さて？

　一人の乗客は切符を持つて卓子の前へ動き出した。駅員はその男の切符に検印を済ますと更に群衆の顔を見た。が、卓子を巻き包んでそれを見守つてゐる群衆の頭は動かなかつた。

　さて？

さて？

さて？

暫くすると、また一人じくじくと動き出した。だが、群衆の頭は依然として動かなかつた。そのとき、彼らの中に全身の感覚を張り詰めさせて今迄の様子を眺めてゐた肥大な一人の紳士が混つてゐた。彼の腹は巨万の富と一世の自信とを抱蔵してゐるかのごとく素晴らしく大きく前に突き出てゐて、一条の金の鎖が腹の下から祭壇の幢幡のやうに光つてゐた。

彼はその不可思議な魅力を持つた腹を揺り動かしながら群衆の前へ出た。さうして彼は切符を卓子の上へ

差し出しながらにやにや無気味な薄笑ひを洩して云つた。

「これや、こつちの方が人気があるわい。」

すると、今迄静つてゐた群衆の頭は、俄に卓子をめがけて旋風のやうに揺らぎ出した。卓子が傾いた。

「押すな！　押すな！」無数の腕が曲つた林のやうに尽くの頭は太つた腹に巻き込まれて盛り上つた。

軈て、迂廻線へ戻る列車の到着したのはそれから間もなくのことであつた。群衆はその新しい列車の中へ殺到した。満載された人の頭が太つた腹を包んで発車した。跡には、踏み躁じられた果実の皮が。風は野の

中から寒駅の柱をそよそよとかすめてゐた。

すると、空虚になつて停つてゐる急行列車の窓からひよつこりと鉢巻頭が現れた。それは一人取り残されたかの子僧であつた。彼はいつの間にか静まり返つて閑々としてゐるプラツトを見ると、

「おツ。」と云つた。

しかし、彼は直ぐまた頭を振り出した。

「汽車は、

出るでん出るえ、

煙は、のん残るえ、

残る煙は

しやん癪の種

癪の種。」

歌は瓢々として続いて行つた。振られる鉢巻の下では、白と黒との眼玉が振り子のやうに。

それから暫くしたときであつた。一人の駅員が線路を飛び越えて最初の確実な報告を齎した。

「皆さん、H、K間の土砂崩壊の故障線は開通いたしました。皆さん、H、K間の……」

しかし、乗客の頭はただ一つ鉢巻の頭であつた。しかし、急行列車は烏合の乗合馬車のやうに停車してゐることは出来なかつた。車掌の笛は鳴り響いた。列車

は目的地へ向つて空虚のまま全速力で馳け出した。

子僧は？　意気揚々と窓枠を叩きながら。一人白と黒との眼玉を振り子のやうに振りながら。

「ア――

梅よ、

桜よ、

牡丹よ、

桃よ、

さうは

一人で

持ち切れぬ

ヨイヨイ。」

底本：「定本横光利一全集　第一巻」河出書房新社
１９８１（昭和56）年６月30日初版発行
底本の親本：「無禮な街」文藝日本社
１９２４（大正13）年５月20日発行
初出：「文藝時代　第1巻第1号」
１９２４（大正13）年10月１日発行
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、旧字、旧仮名の底本の表記を、新字旧仮名にあらためました。
入力：高寺康仁
校正：松永正敏

２００１年12月10日公開
２００６年５月19日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。